

古典的名著に学ぶ 「経営の思いがけないコツ」 一倉 定

事業経営の土台となり、柱となっているものは、次の「四つ」である。

一、環境整備（清潔・整頓・安全・衛生など）である。

一倉先生自身が、「これは、全く意外であっただけではなく、私の考え方まで変えてしまった。これを徹底すると、人間までも変えてしまう。そこにあるのは、“人間革命”ともいえるものである」と語っておられます。

二、「ワンマン経営」の徹底である。

ワンマン経営は、世に言われる独裁、独断、ガミガミとは正反対のものである。真のワンマン経営者は、会社の責任を一身に負う。自らの状況判断に基づいて目標設定を行い、お客様の要求をいかにして満たすかということだけを考えて、それを実現していくことを使命としている。

三、社長自らの、お客様訪問である。

社長自らのお客様訪問のないところに、本当の意味での事業の発展はないのだ。

四、社長自ら経営計画書を作成することである。

「小さな会社だから、経営計画書などいらない」と思うのは、大きな誤りである。どんな小さな会社だろうと、絶対に必要である。

経営計画書を、必ず自らの手で書き上げることこそ、社長として絶対にやらなければならないことである。これなくして、会社の繁栄を実現するのは難事中の難事である。経営計画書こそ、“会社の守り神”である。そして、社長の雑用を無くするものは経営計画書であり、社長は本当の意味で会社の将来だけを考えればよいことになる。作成した多くの社長さん方は、口を揃えて、経営計画書を“魔法の書”と呼んである。その正体は、何であろうか――。

多くの人々を立派に使う法こそ、リーダーシップである。リーダーシップの要諦は、「自らの意図を明らかにする」ことであり、それを最も効果的に発揮する法は、“明文化”である。これが、経営計画書の“魔法”の正体である。

「口頭による指令は忘れられ、文書による指令は守られる」――これが、私が経営計画書の作成を社長に強力に進言する理由である。経営計画書を作成し、その発表会で社長が経営方針の説明をし終わると、役員、管理職、社員を問わず、眼の輝きから言葉も態度も、全く違ってしまうということを見出す。

三年目の経営計画書発表の頃には、元の会社の姿は、驚くほど素晴らしいものになっている。

「まえがき」より



今月のポイント

経営の原理原則、ここにあり！！